午後２時５分再開

○議長（柴田裕隆君）　休憩前に引き続き会議を開き一般質問を続行いたします。

次に14番安陪悟議員の質問を許可します。14番安陪悟議員。

（14番安陪　悟君登壇）

○14番（安陪　悟君）　14番議員安陪悟です。

人生に模範解答はないと言われています。人それぞれ生き方が違うからです。しかし、人には共通する思いがあると考えています。それは幸せになりたい、幸せな暮らしをしたい、この思いは共通するのではないでしょうか。幸せになるためには、まず自分自身が自力で幸せになるための努力が強く求められると思います。でも、自力、個人の力では限界があります。より幸せになるためには、どうしても政治が関与することは現代社会の現実です。一人一人の生活がいや幸不幸を左右すると言ってもいいと思います。そういう意味からも朝倉市２代目森田市長への市民への期待は大であると思います。

その期待にこたえられるために、先日所信や基本姿勢に見られるように、朝倉市の最高財産は朝倉市民、「鉄は熱いうちに打て」という市長の気概、強い意志、政策実行のスピード感等々、所信を忘れることなく頑張っていただきたいというふうに思っております。

本日は市長の公約について具体的にさらにコミュニティ協議会の発足１年目に当たっての課題、これを伺いたいと思います。

あとは質問席より続行いたします。

（14番安陪　悟君降壇）

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　市長のこの日本一これに森田市長のすべての気迫があるように私は理解をしております。

そこで、この朝倉郷土の政治の中で、特に市町村長を指しますけれども、この日本一を目指した市長、町長、村長がいるか調べましたところ、私の調べた範囲の中では１人日本一を目指した人がいます。それは三奈木加藤新吉村長です。

昭和25年今から60年前になりますけれども、不幸にして原因不明の三奈木小学校が全焼をいたします。そのとき、村長は日本一の学校をつくろうと、そのためには環境を大事にしたい、教育環境こそがよりすばらしい人間形成に影響を与えると、そういうことで校舎の中に自然の川が流れる、あるいはその当時全くどこの、全国どこにもなかった学校の中に郷土歴史館をつくる、そういう発想のもとに学校を建設し、教育をもって日本一になろうと、そういう気概を加藤村長は、村民に訴えられております。

日本一、そのためには教育というのが絶対不可欠ではないか、教育の充実こそがこの日本一に近づく道ではないかなと、そういう思いでまずこの教育について、市長の考えを伺いたいと思います。

○議長（柴田裕隆君）　市長。

○市長（森田俊介君）　今、加藤村長の話が出ました。私も実は加藤村長がお話になった、まとめた本がございます。たしか三奈木の出された本がありました。随分前に読ませていただきました。と申しますのは、実は私の兄貴の名前をつけたのは加藤村長さんなんですよ。そういったこともございまして、加藤村長につきましては、満鉄の重役から終戦後こっちに帰ってこられて、あるときは福岡の市長にどうかという話まであったという方だそうです。私は直接面識はございませんけれども。それだけやはり地元にとっては非常に当時の戦後のこの甘木、そして三奈木という地域にとっては非常に貢献をなさった方だし、いろんな面で三奈木にいろんな面での財産を残された方だというふうに認識しております。教育という話が出ました。その前に日本一のふるさとという書き方をしております。これはどういうことかと申しますと、先ほど幸せについて安陪議員が話をされました。言うならば、幸せも人によって、その幸せの形というのは違うわけですね。いろんな方が思う幸せがあります。それと同じように、日本一、私は物が、これがあるから日本一という形で書かせていただいたわけじゃありません。そこに住む人たち、あるいはここで生まれ育ってよそで、その他の地域で活躍をしていらっしゃる人たち、その人たちが自分たちが生まれ育ったこの朝倉は日本一のふるさとなんだと感じていただけるような、形じゃなくてそう思っていただけるような地域をつくりたいという思いで日本一という名前を出させていただきました。

そこで、教育についてでありますけれども、地域づくりは教育からという言葉がございます。あるいは国づくりも教育からだというふうに認識しております。日本という国、資源もそう大してございません。今いろいろ問題があるにしても戦後、これだけの世界第２位の経済大国と言われるまでになった。それはなぜかというと、やっぱり日本人なんです、人です。あるいは坂の上の雲、秋山兄弟を初めとした明治のあの当時の人たちが、上を向いて坂の上に雲がある、それは青空と欧米、それに追いつけという形の中で努力をされた。もちろん本人たちの資質もあるんだろうと思います。しかし、それを育てた明治のあの当時の教育というものも大きくそのことに貢献しておるというふうに思っております。そのことを考えた場合に、やはり先ほど申しましたように、地域づくりは教育からということで、やはり教育というのは大事なものだと思いますし、また私はその中で特に申し上げたいのは、ここでまた生まれ育った子どもたち、教育を受けた子どもたちが、やはり自分のふるさとに誇りを持てるような教育、それとともにパブリックマインド、公共精神とでも申しましょうか、そういったものを兼ね備えた子どもたちを育てること、これがやはりこの地域の将来を見た場合大事なことだというふうに思っておりますので、そういう意味で教育というのは非常に重要なもんだという認識を持っております。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　市長の教育に対する思いを今お聞きしましたけれども、この加藤村長が郷土の歴史館をつくるに当たっては、村民はこれは村長の趣味でやってるんじゃな

いかなという批判もあったことも事実です。しかしそれをあえて実行されたのは、実はこの歴史資料館をつくることによって、人材を育成したいという思いがあったと言われています。この歴史資料館の中には、三奈木の古代から現代までいろんなものを集めなければいけません。そのために村長は糸島出身の当時全く無名であった原田大六という考古学者を呼んで、そして研究をさせています。

ただ、この原田大六を呼ばれたのは実は青年団教育に力を注ぐための一環であったわけです。この原田氏に学ぶことがたくさんあるから青年団よ頑張れと、そういうことで村長はこの郷土歴史資料館を建設をされるわけですけれども、あわせてその当時、三奈木村民の教育力も向上したというふうに言われています。

今度、市長は副市長を選任されるに当たっては、この郷土じゃなくて他のところから選任されたということについては、大いに意味あるというふうに私は思っています。

ところで、副市長に要望しておきますけれども、実は幕末、福井藩の松平春嶽は藩の行財政改革をするに当たって、全く違う藩から学者を招聘して藩財政に当たっています。それは横井小楠という人物です。この横井小楠を呼ぶことによって、福井藩は財政改革をなし遂げるとともに、藩全体が非常に活性化されたというふうに言われています。副市長も大変と思いますけれども、ひとつ横井小楠のような気持ちで頑張っていただきたい。

そこで、市長に一つ提案がありますけれども、考えていただきたいと思いますけれども、実は日本一に近づくためにはこの職員集団の質が高まらなければいけないんじゃないかなと、これが非常に重要な課題になってくるんじゃないかなと。そうすると、課長以上、課長、部長は一定の権限が与えられていると思いますけれども、この課長、部長あたりを民間から採用して、この活性化する方法というのもあるのではないかと。その点については市長がもし考えがあればお伺いしたいというふうに思います。

○議長（柴田裕隆君）　市長。

○市長（森田俊介君）　一つの提案というふうに受けとめさせていただいときますが、地方自治体、国は別ですけれども、地方自治体はいわゆる大統領制です。アメリカあたりの大統領はかわったら自分のスタッフというのはほとんど役所の人間じゃなくて、民間を持ってきて自分の周りを政策を実行するというふうなことも行われていることも事実であります。私が今すぐそういうことをするということじゃないんですけれども、ひとつ検討する価値のあることではあるというふうに思っております。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　私も微力ながら７年間、８年目を迎えていますけれども、市民の代表としてどうも率直に言って、市の行政にはスピード感が欠けてるんじゃないかなと、遠慮してやってるんじゃないかなと、そういうところにカンフル剤を打つにも民間とかあるいは他の都市と交流人事をしてやるとか、何かそういう方法でいかないと、前例主義でいっても改革はできないのではないかというふうに思いがあるから質問をしたわけであり

ます。できれば十分検討していただきたいというふうに思っております。

そこで、教育の延長戦としてやはり学校のあるべき姿というのは、問題になってくるんじゃないかなというふうに私は思っております。

そこでまず、私の学校のあるべき姿を申し上げたいと思いますけれども、その後、教育委員会の見解もお聞きしたいわけですけれども、まず、学校は３つの視点から考えられるんじゃないかなと。１つの視点は子どもたちにとって学校はどうなのか。２点目は保護者から見て学校はどうなのか。３点目は地域から見て学校はどうなのか。

まず、子どもから見て学校は、きょう勉強して帰ってきて、あしたまた早く行きたい。そういう思いを持つような学校が一つのあるべき姿じゃないかな。

２点目の保護者から見ては、自分の子を預けてよかったというような学校があるべき姿ではないかと。

３点目はさっき市長が言われたように、地域の人たちが自分の地区の学校に誇りが持てるような学校。それが一つあるべき姿じゃないのかなと。ただ時間の関係で十分説明ができないところがありますけれども、それは教育委員会は専門ですから、私の言わんとするところを以心伝心でとらえてほしいというふうに思っております。

まず、教育委員会の見解を聞いて、その後、市長は学校のあるべき姿をどういうふうに考えてあるかをお聞きしたいというふうに思います。

○議長（柴田裕隆君）　教育部長。

○教育部長（藤本具彦君）　議員御質問の学校のあるべき姿をどう考えてるかということでございまして、議員のほうから子どもたちから見て、また保護者から見て、地域から見てということでのお話をいただいたところでございます。教育委員会といたしましては、教養ある国際社会に貢献できるたくましい日本人の育成、または市民の育成という観点に立ち、本年度の教育施策としまして、朝倉市学校教育目標を高い志を持って学び生きる力をはぐくむ魅力ある学校づくりとし、１つ目は知・徳・体のバランスがとれた健やかな子どもの育成、２つ目としまして学力向上と教師の指導力向上による楽しい授業、３つ目としまして安全安心、安定した地域との連携によるおらが学校づくりと定めまして取り組みをするようにいたしているところです。具体的には目標としまして、確かな学力の育成、豊かな心の育成、健やかな体の育成、信頼される学校づくり、教育環境の充実と定めまして取り組みをさせていただいております。それをより実現的にするためには、地域の実態を十分に把握するとともに、家庭や保護者も含めたまた地域との連携協力を密にした、そういう工夫を生かした教育活動を展開をしながら、魅力ある学校づくりができるように取り組み、また努力していくというふうに考えているところでございます。以上でございます。

○議長（柴田裕隆君）　市長。

○市長（森田俊介君）　学校のあるべき姿をどう考えるかと、今教育委員会のほうから、

教育委員会としてのあれは朝倉市の教育委員会の方針というような形だろうと思いますが、私は端的に自分が小学校、中学校行ってたときのことを思いながら考えますと、私どものとき、特に中学校は私どものころはようたたかれました、先生から。しかしそれでも学校は楽しかったです。そのたたいた先生を恨んだこともありませんし、今むしろ恩師として同窓会のたんびに来ていただいております。やはり本来的に学校というのは、特に義務教育という形で言うならば、知識を教えるところです。そのほかのいろんなしつけですとか、そういったものは第一義的には家庭ですね。しかし、残念ながら家庭だけでは、そういった一般社会でのルールとか教える場合に、まだ足りない分、その補助的に学校は教えるんだろうと思うんですが、第一義的な知識だろうと思います。しかし、その中で先生が非常に大きな、学校については先生というものが非常に大きな要因をなす。先生によってやっぱり子どもたちは学校が楽しいと思うし、つまらんとも思う。しかし、その先生にはやはり知識を教えるという、ただ教育マシーン、教育を知識を教える機械じゃなくて、人間としての先生の魅力がないとなかなか子どもたちも学校に楽しく行けない。やはりそういった学校がやっぱり学校があるし、先生があるべき姿だろうというふうに考えます。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　興奮をしていたわけじゃないですけれども、コップ、水をこぼしてから申しわけありませんでした。ただ、最終的に学校のあるべき姿を具現化するためには、職員、校長の学校運営の力量、教師集団の質、どうしてもこれは欠くことのできない最大の要件であろうと思うんですね。

そこで、質問事項から外れるかもしれません。でも教育という立場で考えれば一緒ですから、その朝倉市の現在の校長の力量、職員の質、どのような実態であるのか、あるいはそのためにどうしようとしているのか、完結にできれば教育長のほうから回答をお願いしたいというふうに思います。

○議長（柴田裕隆君）　教育長。

○教育長（宮﨑成光君）　先ほど部長のほうがお答えしました分に若干つけ加えをしてお話ししたいと思いますが、先ほど申しました魅力ある学校づくりは教育委員会としては４つの面から考えております。先ほど３つは議員がおっしゃいましたのでそのとおりでございます。教育委員会が抜けとったと思って今取り組もうとしておりますのは、今議員が質問されるところに一番関係が深いところだと思っております。

教職員にとって魅力ある学校にしなければならないと。学校ですから一番最初は子どもにとってということだと思います。次に保護者、そして地域、そして教職員にとっても魅力ある学校にする必要があると思っています。この面が教育委員会は若干弱かったと考えております。教職員にとって魅力ある職場といいますのは、自分の夢であります将来の日本を背負っていく人間を育てる、そういう仕事についているわけですから、その仕事が十分できるということが一番魅力ある職場だと考えています。力量が進んで発揮できる、ま

た成果や貢献が評価していただける、子どもの生活が規律正しくて、集中して学習活動に取り組める、職場の仲間が明るくて協力して仕事ができる、保護者や地域の理解、協力があって、安心してのびのびと仕事ができる。そのような要件が幾つかあるんではないだろうかというふうに思っています。こういう面での教育委員会からの支援といいましょうか、配慮といいましょうか、そのあたりがこれまでは若干抜けておったところがあると思いますので、この点を今まで取り組んでいましたことに加えて、先生方にとっても安心して魅力ある学校として、職場として働いていけることが子どもたちの教育につながると考えています。職員の資質はどうか、校長の資質はどうかということでございますが、この点については私は胸を張って優秀だと考えております。

いろいろ心配事をおかけするようなことも確かにございますが、全体的に見ますと、非常に熱心で優秀であると思っています。一つの尺度としまして、教育行政を指導する立場に、ここは北筑後が近くにあります。それから県の教育委員会等がございますが、そういう場所に出かけて指導的な立場で頑張っていただいている先生方、多くこの地から出ていっていただいています。ここで頑張っていただいた先生方はそういう場でも認められるような自分だけではなくて、周りからも認められているようなことがあると思います。残念ながら一方では優秀な先生を出しますと、その分手薄になるという矛盾したところもございます。

今、議員がおっしゃいました実態はどうかというふうなことですが、世の中が変わってきましたので、これまで優秀だった先生、優秀と思われる手法だけではうまくいかないようになって、柔軟性を持った管理職として立ち向かうことがこれから先重要であるというふうに考えています。教育委員会もそういう意味も含めまして変革していく必要があるんだろうと考えています。以上でございます。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　身内のことをいいとか悪いとか、特に悪いということは言いにくいところがあると思います。でも褒め殺しというのもありますから、十分注意をしておかないといけないんじゃないかなと、これは教育長よりも僕のほうがちょっと年齢が上だから忠告をしておきますけれども、悪いところはやっぱり悪いと、はっきり言って指導していかなければ、本当の力を伸ばし切れないで終わるんじゃないかなというような思いも持っております。ただ、全国学力テストを見ると、朝倉市はそんなに上位じゃないですね。福岡県そのものが上のほうではないですからですね。

そこで、これは一つ検討していただければ結構ですけれども、秋田県が全国一というふうに言われています。この財源との絡みがありますけれども、思い切って来年度予算編成あたりでは、沖縄県がやっているように、秋田県の先生を招へいをして、１年間でもいいですから。その事業のあり方、あるいは家庭とのあり方、私も十分調査してませんけれども、やはりちょっと子どもに学力をつけるためのやり方が違うんじゃないかなと、だから

思い切ってそのようにいいところを学ぶという意味で来年度あたりは思い切って予算要求をして、そうすれば子どものためにも職員のためにもなるんじゃないかなというふうに思っております。

そこで、次に移りますけれども、市長のこの公約の中に小中一貫の教育を検討しますというのがあります。私の考えは後で述べることにして、まず教育委員会としては、この小中一貫教育をどのようにとらえてあるのかをお聞きしたいというふうに思っております。

○議長（柴田裕隆君）　教育長。

○教育長（宮﨑成光君）　小中一貫教育につきましてはいろいろ論議がありますし、小中一貫校を設置していただきたいと、そういうふうな声が出たりいろいろします。一般的にこの小中一貫教育については、教育委員会が考えていますこと、それからいろいろお話をされる方によって定義が若干違ってるところがございますので、そのあたりを明確にしながら考えていく必要があるんじゃないかなというふうに思っています。

小中一貫教育と議員がおっしゃってありますが、これは教育内容の一貫というふうなことで理解してお話をしたいと思います。この典型的なものは、小中一貫学校をつくって、小中一貫の教育をするという考え方が典型的にあるんではないかなというふうに思っています。これにつきましては、県内では宗像市とか先進的に取り組んであるところがあります。東京のほうでは品川区とかいろんなところで取り組んでありますが、委員会としまして、メリット、デメリットを一応どんなこととして上げてあるかは一応整理しておるところでございます。朝倉市内としましては、秋月中学校区のほうで小中一貫ということで、心豊かな児童生徒を育てるということで、研究指定を受けて取り組んだ経緯がございます。また、県指定で小中連携ということで取り組んだ経緯がございます。その研究の成果の中では、非常に効果があると思われることがたくさんございます。また、一体型、小学校と中学校がそばにあるという一体型とか、併設型、そういう施設であればもっとやりやすいだろうなと思われるようなところもあります。朝倉市教育委員会としましては、秋月中学校で先導的に取り組んでいただきましたこの研究成果をもとに、それぞれの学校でよさが取り入れられるところは取り入れてやっていきたいというふうに考えて取り組むようにしているところでございます。以上でございます。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　市長はこの小中一貫教育を検討しますということを書かれていますから、その前にやはり小中一貫教育について十分研究されたのではないかなというふうに思っております。それで教育委員会の今の話を聞けば、教育委員会の見解わかりましたけれども、市長は小中一貫教育についての考えといいましょうか、それについてお聞きしたいと思います。

○議長（柴田裕隆君）　市長。

○市長（森田俊介君）　マニフェストの中で小中一貫教育の検討という形で書かせていた

だいております。今教育長のほうからるる答弁がございました。小中一貫教育といってもいろんな形がございます。いわゆる一つの学校にまとめてしまう形とさっき言われたように、校舎は違うけれども、例えば一つの中学校に１校だけじゃなくて、２校、３校一緒になって小中一貫すると、そういったいろんな形があります。小中一貫教育での私どもが県内でも既に八女等で実施がなされておりますけれども、聞くところによりますと、非常に教育的にも要するに子どもたちのいわゆるよく中１ギャップとか言われますけれども、そういったものの情緒の安定、落ちついて勉強ができると、そういった非常なメリットも聞かされております。逆に大変なこれがデメリットというのかどうかは別として、難しい問題等も聞かされております。ただ、私がここに検討という形で上げさせていただいたのは、県等で研究指定校等でそういった試みはなされておったわけですけれども、残念ながら朝倉市においては真正面から小中一貫教育を研究するとか、そういった試みが残念ながらなかったように思います。ですから、これは今からさっき言われたメリット、デメリットを十分どうあるべきかと、どういうことがメリットでどういうことがデメリットなのかということを十分教育上の観点で精査した上で、それからまずは検討してみようと、それから本当によかったらやろうじゃないかという考え方です。ただ、一つだけ、ちょっと注意というか、確認をさせていただきたいのは、ともすると、小中一貫教育が学校の統廃合の口実として使われることがあります。それではない、あくまでも教育の観点でどうなのかということを検討するということでございますので、そこらあたりは御理解いただきたいというふうに思います。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　小中一貫の教育を実践する学校、まちというか、市と言っていいと思いますけれども、それは増加する方向にあるんじゃないかなというふうに私は認識してるんですね。要約だけ申しますと、小中一貫の利点はまず学力が向上すると、２点目は朝倉市内の中学校ではそうないかもしれんけれども、中１のギャップを解消すると、３点目が小中の先生たちの交流は当然なされますから、教職員の質が向上すると、そういう３点から、それは主なもの、まだほかにもありますけれどもですね。小中一貫を目指す教育が増加しているというふうに理解をしているわけですけれども、朝倉市も児童生徒数減によって、統廃合を必ずしなければならない時期が来ると思います。それは５年先あるいは６年先かわかりませんけれども、近いうちに必ず来ると思うんですね。そのときこそ、今、教育委員会は秋月のことを出されましたけれども、そういうのを参考にして、その統廃合のときには小中一貫、ひとつ、青写真をつくってほしいなと思うんですね。それが市長のマニフェストにも連動すると思うんですよ。そのことをぜひ要望をしておきたいと思います。

次に、コミュニティ協議会について質問いたしますけれども、これは前師岡議員のほうから質問がありまして、重複する点もあるかと思いますけれども、一応白紙に返して、改

めてお答えをお願いしたいと思いますけれども、私が気になるのは、私は三奈木地区だけの総会しか参加をしていませんから、ほかの１６地区のことはよくわかりませんけれども、会長さんは中身の問題は別にして、ただ名前が変わるとコミュニティと、それだけですよと。だから今までやってることをそのままするんですから、名前だけが変わるだけですよと。そういう認識をされてある会長さんたちが多いんじゃないかなと。本当のコミュニティ協議会が目指すものは何かということをしっかり、これは市民にもそうですけど、まずその立場にある責任者がきちんと整理をしておかなければ、本当の目的へ前進しないのではないかというふうに思っているんですね。その点、どのように執行部は考えてあるかお願いをしたい。

○議長（柴田裕隆君）　総務部長。

○総務部長（樋口信尋君）　この件につきましては、先ほどの師岡議員の質問で回答した答弁と重複するかもいたしませんけど、この問題につきましては、平成20年１月にコミュニティ推進委員会を設置し、地区振興会長会、それから区会長理事会、公民館長会、こういった各種団体との協議を重ねまして、この朝倉市のコミュニティ推進指針等を作成をいたしております。このコミュニティによりますまちづくりの必要性や将来像、またこれは特に権限、財源、分限というのがありますが、組織機能がありますが、この財源等についても一定の整理を行いながら、今後検討が必要な課題もたくさん残しながらも、市内16地区において今年度スタートをいたしました。

御質問の目的達成の共通課題につきましては、先ほど申しましたように、現段階におきましては、まだまだこの目的達成、共通認識といいますか、この問題につきましては、まだ多くの問題あるいは十分な浸透をしてないということでございます。これにつきましては、今後とも引き続き、目標等をいたしております平成25年度を目標とした組織あるいは財源、それから権限の課題、問題など、年次的な計画を策定しながら、今後の朝倉市のコミュニティの将来像が地域住民の皆さん方に十分理解できるように、今後、一層の推進を図って行きたいというふうに考えております。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　３カ年間は試行期間で４年目から本格的な実施というふうに以前から執行部は言われていますから、それはもう変わっていないだろうと思うんですね。でも、３カ年というのはもうあっという間に終わるんですね。特に市長の「鉄は熱いうちに打て」、この１年間が勝負じゃないかなというふうに僕は思ってるんですね。だから執行部としてはもう大体５月で各地区の総会は終わっていると思います。その総会の議案もあると思います。だからそれを分析をされて、現在のところ、格差、特性じゃないです。特性はあっていいと思うんですね。目的を達成するために課題の大きいところとないところ、そういう現時点でそういう各地区の格差というのは、実態としてはどうなっていますか。

○議長（柴田裕隆君）　コミュニティ推進室長。

〇コミュニティ推進室長（田篭和明君）　安陪議員が質問のコミュニティ組織の格差につきましては、私どもがこのコミュニティを取り組む中で、甘木地域、朝倉地域、杷木地域、それぞれに格差があっております。それを目指す姿としましては、甘木地域の地区公民館を利用したいろんな事業活動に近づけていこうということで、朝倉、杷木地域もそれに沿った形で進めさせていただいております。

今年度の取り組みにつきましては、余り時間がなかったせいもございまして、事業計画とか予算の配分につきましては、昨年度同様の事業を引き継いだ形で執行していただくような格好となっております。今後につきましては、コミュニティ会長会あるいは公民館長会あたりで、各地区の取り組みの状況あたりをその中で研修というような形で報告をしていただいて、なるべくそういう格差の出ないような取り組みを進めていきたいというふうに考えております。以上でございます。

〇議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

〇14番（安陪　悟君）　いずれにしても、そういう格差解消のためにも、会長さんたちに十分これを再度理解するための研修会等も開かれると思います。しかし、その前に講師を呼んですることも大事と思います。でも現実には本当の実態は知られていないところがあると思うんですよね。だからコミュニティ協議会に配置をされている方は現在６名ですね。その６名の人が、本当にコミュニティとは何かということをわかりやすく会長さんたちに説明できるだけの力量をつけないといけないんじゃないかなと。もちろんその研修はされると思いますけれども、そしてだれが行っても、課長が行っても係長が行っても、普通の職員が行っても説明できるような、それだけの力量をつけないと、これはなかなか成功しないんじゃないかなというふうに思ってるんですね。みんなもそう思ってあると思いますけれども、私が特に思うのは、このコミュニティ協議会が成功するかしないかは、非常に市民の暮らしに影響すると思ってるんですよ。さっき言いましたように、市長も言われているように、今から先は、自分たちの校区は自分たちでやると、そういう力をつけるとともに、やっぱり行政がいかに支援するか。ただ現実には自分たちでこう変革をしようというのは改革しようというのはできないというふうに思われていいと思うんですよ。これは今までの歴史があるから、前のとおりしておけばいいという考えが非常に強いんです。これだけは頭に入れてしていかないと、なかなかですね。そのためにはいやも言われるかもしれんし、いろんな抵抗もあるかもしれませんけれども、たやすいことをするとは素人でもできるんですね。でも難しいことを改革し成功させる、それがプロの職員ではないかなと思ってるんですね。だからひとつ、さっき言いますように、職員がその力量をつけてほしいというように思っております。

次に、最後になりますけれども、ただこれについては９月にももう１回、もう２カ月間ありますから、勉強して質問したいと思っていますけれども、ただあえてこの場をかりて質問しておきますけど、財政、財政は全体で約5,200万円を配当されていますですね。財

政は僕はある程度いいんじゃないかなというふうに思いを持っています。しかしまだ、詳しく調べてませんからわかりませんけど、5,200万円のあれは。ただ配当の仕方には問題があるんじゃないかなというふうに思っております。

それと、組織ですね。組織が全体の総会の議案を見ていませんからわかりませんけれども、自分の地区だけを見てみますと、一番組織の大きい老人クラブ、高齢者の知恵、そういうのをかりてコミュニティ協議会を活性するためには、そういう位置づけがなされていないところが多いんじゃないかなと。あるいはさっき出ていたボランティアの位置づけ、各地区にボランティアがあります、その位置づけ、だからもう少し組織の見直しをして、一つのモデルというのをつくってやっていく必要があるんじゃないかなというふうに思ってるんですね。

それと権限ですね、やっぱり。本当にやるぞという思いにさせるためには、行政が一定の権限を与えるように、これを実は９月の中では十分論議していきたいというふうに思ってるんですね。というのは、どうも今のままでいったら、区会長とコミュニティ協議会の関係がどうなるのかなと、二元外交じゃないけども、日本だけになるんじゃないかなと。だからそこらあたりは９月に十分論議したいなというふうに思っております。私も２カ月間かけてそこあたりを勉強したいなというふうに思っております。

そこで、一つだけ答えていただきたいのは、組織ですね、組織は担当者から見て十分位置づけがなされているかと、そこあたりはどうですかね。

○議長（柴田裕隆君）　コミュニティ推進室長。

○コミュニティ推進室長（田篭和明君）　今年度から市内、美奈宜の杜地区を除きます16地区でコミュニティに取り組んでいただいているんですけど、この16地区のうち、12の地区が部会型で組織を設置されてあります。それから残りの４地区が今までどおりの並列型で取り組まれているようになっております。コミュニティ推進委員会の中では将来的には各種団体が網羅されて、住民の声が反映される部会型を目指していこうということになっておりますので、これにつきましても、何年か先には部会型になるんじゃなかろうかということを思っております。私どもも各地区の説明会に参ります中では、ある程度一定の部会型の組織が標準的なものを提案をさせていただいております。あとは時間もないということもございまして、今年度におきましては、16地区のうち12が部会型、残りの４つが既存組織の並列型でいっているというような状況でございます。以上でございます。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員。

○14番（安陪　悟君）　９月のときに、これを若干の時間をさいて論議したいと思いますけれども、そのときには、副市長はたしか、県では地域振興課におられたですね。地域振興課ですか。いずれにしてもさっき言った横井小楠の気持ちで９月には新たな視点で、私たちはどうしても惰性できているところがあるから、新たな視点でコミュニティ協議会の朝倉市のあり方を、ひとつ御答弁願いたいと思いますので、よろしくお願いをいたしまし

て、私の質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（柴田裕隆君）　14番安陪悟議員の質問は終わりました。10分間休憩いたします。

午後２時58分休憩